

第2編4章解説

本章では、地域での順応的管理に関わる研究を2つ報告する。順応的管理の考え方基礎にあるのは、「流域環境の諸現象の理解は不確実な場合がある」という認識である。順応的管理では、この不確実性への対処として、環境管理実践に対する自然環境の応答を注意深く観察し、環境に関する理解を深めながら、管理を進めていく。本プロジェクトの示す流域管理の枠組み（第1編参照）では、さまざまな環境管理主体がそれぞれの空間スケールにおいて順応的に管理することを提唱しているが、本章では、農業集落・町や稲枝地域（市町）といった空間スケールでの順応的管理に焦点を置く。

概念的に言えば、順応的管理は次のような段階を含む。まず、明確な環境管理の計画（P）を立案する。続いて、その計画を実施（D）して、実施対象である環境をモニタリング（C）する。モニタリングの結果に基づいて計画を見直す（A）。そして、見直した事項を反映した計画を改めて作る。2つの節では、稲枝地域（メソスケール）・農業集落（ミクロスケール）における農業濁水問題を事例としながら、これらの段階（P→D→C→A）の異なる箇所注目して、濁水削減のための順応的管理の実践可能性を検討する。

第1節は、稲枝地域でおこなった社会心理学的研究の成果である。まず、濁水削減に対する農家の態度や行動は集団説得によってどのように変容するのかを検証する。つづいて、個々の農家が濁水削減行動をどのようにおこなっているのか、その意思決定過程についても分析する。順応的管理の見直しから実施に至る段階（A→P→D）は、管理実施に対する自然環境の応答をふりかえり、次の行動を変化させていく過程であるが、本節の研究では、このプロセスに注目する。

第2節は、稲枝地域の圃場群・小河川においてモニタリングを試行した研究の成果である。はじめに、2種類の簡易な手法を用いて、農業濁水のモニタリングをおこなった結果を示す。続いて、モニタリング結果の活用について、仮想的な管理計画において考察する。本節では、順応的管理におけるモニタリング（C）手法とその結果の管理計画での活用注目して、実践可能性を検討する。

多様な実践と豊富なコミュニケーションによって成り立つ順応的管理を、農業濁水削減に適用する場合には、地域の多くの農家・住民による協働が求められると考えられる。その協働を支えるのは、濁水削減に対して高い意識を持つ個々の農家・住民の行動であるだろう。2つの研究では、地域外部からの環境情報提示（第1節）と地域内部での環境情報蓄積（第2節）という点に違いはあるが、地域社会によるそのような協働を支援するという立場は共通している。

田中拓弥